



Title	スペイン語縮小辞について：形態・意味機能と通所・通層的分析
Author(s)	西村, 君代
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58747
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	西 村 君 代
本 籍 (国 籍)	
学 位 の 種 類	博士 (言語文化学)
学 位 記 番 号	甲 第 17 号
学位授与年月日	平成14年3月27日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	スペイン語縮小辞について一形態・意味機能と通所・通層的分析
論文審査委員	主 査 教 授 伊 藤 太 吾 副 査 教 授 中 岡 省 治 副 査 教 授 出 口 厚 實 副 査 教 授 郡 史 郎 副 査 助 教 授 木 内 良 行

論文の内容要旨

スペイン語縮小辞をテーマとする本論文は、3部から構成されている。第1部では縮小辞の形態・意味機能、第2部ではその地理的バリエーション、そして第3部では話者や発話状況といった要素との関連がそれぞれ考察される。そして各部は2章ずつに分かれる。

第1部では、スペイン語縮小辞に関する先行研究による基本的な議論が検討される。第1章では、まず、縮小辞の基本的意味を「縮小」ととらえるか「感情」ととらえるかという伝統的な議論の整理を行う。しかし、どちらの立場も、縮小辞の多様な用法を説明するに足る説得力に欠ける。そこで、本論では、縮小辞は、縮小という意味を内在的に持ちつつも、基本的には何らかの主観的評価の標識にすぎないという立場を取る。したがって、縮小辞そのものは明確な意味を持たず、実際の意味は各文脈で具体的に決定される。また、縮小辞が用いられることは常に主観的な評価の存在を示し（この点で語彙的意味として評価を示す形容詞とは異なる）、かつ、話者が指示対象を何らかの形で「縮小」したものであるとして表現するということになる（したがって、実際には縮小されえない事物や大きい対象物を指すこともできる）。さらに、縮小辞が「標識」としての機能を特化すると、新たな記号内容に対する命名手段としての派生にも用いられるのだと考えられる。またこの章では、縮小辞の示しうる文脈的意味の分類基準に関する先行研究も概観しており、縮小辞の解釈に際しての尺度がいくつか例示される。

続く第2章は、意味・機能という側面と同様活発な議論の対象である縮小辞の形態面をテーマとしている。自らの屈折語尾を持たないこと、派生語における他の接辞との相対的な位置関係など、派生接尾辞の中でも縮小辞をはじめとする評価接尾辞に特有な性

質がまず確認される。次に、やはり頻繁に議論されてきた問題である、基体語の語幹と縮小辞との間に現れる音要素 (-c-, -ec-, etc.) の扱いが検討される。本論文では、記述の経済性からも理論的な妥当性からも、それらを派生の語幹と接尾辞との間に挿入される "interfijo" (接間辞) という接辞であるにとらえる主張を支持する。また、接間辞は縮小辞との共起においては生産的であるが、その主な機能は、縮小辞による派生において基体語の復元を容易にすることであると考えられる。続いて、cerqu-it-a や Carl-it-os, azuqu-ít-ar など、縮小辞が接尾辞ではなく接中辞として働いていると考えられる事例を扱う。性と典型的な対応関係を示す屈折語尾ではない語尾 (主に -Vs) をどう扱うかによって、接中辞を認めるかどうか異なる立場が生じることを示した上で、本論文では、これらは形態論的には明らかに接中辞化であるが、前述したような基体語の復元力を高める目的で使用されるあくまでも例外的な手段であり、話者にとって縮小辞は常に接尾辞として派生に携わるという考えを取る。最後に、縮小辞による派生を規則化する試みを先行研究から検討する。

第2部は、縮小辞を個別の地理的環境におかれたものとして観察する通所的分析をテーマとし、それぞれの地域の縮小辞を共通の視点から分析することで、広大なスペイン語圏全体の縮小辞使用を概観することを目指している。そのための方法として、第3章では量的な側面、第4章では質的な側面に注目して作業を行う。

まず第3章では、先行研究に見られる縮小辞使用の量的側面に関する記述を確認することから始め、いくつかの都市や国についてなされている指摘は、ほとんどが資料による裏付けに欠ける、単純な印象論に近いものであるということを明らかにする。そこで、スペイン語圏 12 都市の口語スペイン語コーパスを中心として用い、本章の量的分析では、各都市における生起回数はもちろん、頻度数だけでは測れない生産性をより適切に理解するために、基体語の異なり語数との関係や基体語の統語的・語彙的性質なども考慮に入れた考察を試みている。結果として、コーパス中の 12 都市に関しては、縮小辞が非常に生産的である数都市が見られる一方で、その他の都市については大きな差異は観察されず、ほぼ平均的な縮小辞の使用状況を示しているということが分かる。したがって、先行研究にあるいくつかの都市における縮小辞の乱用の指摘などは、やはりステレオタイプ的な見方を脱していないことになる。

第4章では、縮小辞を質的な角度から分析する。つまり、それぞれの使用例を数的に扱うのではなく、その形態に注目して、都市間に見られる共通点や相違点を明確に記述することを目指すわけであるが、まず、縮小辞の形態を議論する際に、本論文では2つの概念の区別を明確にする。-ito や -illo などの縮小辞は、主観的評価の「しるし」である形態素 (morfema) {縮小辞} のそれぞれ形態 (morfo) である。しかし、これらは意味的差異によって選択されるために、純粋な異形態 (alomorfo) とするのは不適切である。さら

に、各接尾辞が接間辞の有無によって取る -ito, -cito, -ecito などは、それぞれが基体語の環境によって選択される異形態の関係にある。そこで、本論文では、縮小辞としての同じ基本的機能を共有しながらも、純粋な意味での異形態とは言えない前者を類義形態として、従来の形態的な異形態と区別することを提案する。

この区別にしたがって、まず各都市で用いられる縮小辞の類義形態はどれかが観察されるが、その状況にはいくつかのタイプが見られる。類義形態が基体語の音韻条件によって選択される、すなわち、純粋な異形態として存在している都市があり、また、-ito が実質的に唯一使用される縮小辞である、つまり類義形態の存在しない都市も見られる。しかし、多数を占めるのは、複数の類義形態が共存し、その使用の頻度や意味の特定度に差が見られるような都市である。さらに、どの都市でも最も多く用いられている縮小辞の類義形態が -ito であり、それが唯一の縮小辞となっている都市もあることから、-ito が「標識」として最も中立的で意味機能的に柔軟性があるもの、つまり、最も無標性の高い縮小辞であるという結論が得られる。

続く異形態の分析では、地理的変異の見られることの多い、pueblo（最初の音節に二重母音を含む2音節語）、novio（二重母音で終わる2音節語）、grande（-eで終わる2音節語）、flor（子音で終わる単音節語）のような基体語の形態構造のいくつかのタイプを比較し、その実態を観察する。前述のコーパスのデータを他の研究の調査結果やデータベースで補完することによって得られたスペイン語圏全域のデータに基づいて、各地域における異形態の出現状況を展望し、さらに、異形態の現れる要因や傾向を指摘する。また、いくつかの地域間で、異形態の使用状況に類似性が見られることも明らかになり、それがこれまで提案されてきた方言区画と一致点を持つことも示される。そして最後に、縮小辞として無標である -ito 以外の類義形態が持つ意味の傾向を観察し、また、各都市において見られる語彙化の程度の高い縮小辞形の指摘を行う。

言語における話者や聞き手の属性の影響を研究する通層的視点は、評価接尾辞という話者とその主観的評価を示すために存在する言語形式に関しては、特に興味深いものであると言える。そこで、第3部では、縮小辞の研究においてこれまではしかるべき対処がなされてこなかった語用論的側面と社会言語学的側面をテーマとしている。したがって、まず第5章では、語用論、社会言語学における先行研究を、縮小辞との関連を考慮しながら検討する。前者については、ポライトネス理論において縮小辞がどのように機能するものとして扱われているかを概観し、特にその和らげ、強意という働きについて考察する。また、後者の社会言語学的側面については、これまでの縮小辞研究に見られる話者の属性に関する記述を確認する。

それらの成果を参考として、第6章では、スペイン語母語話者の協力を得て実施したアンケート調査の結果分析を行う。アンケートで考慮した要素は、話者と聞き手それぞれ

れの性、世代、聞き手の地位（職業）、話者と聞き手の親疎関係と相対年齢、縮小辞の用いられる発話の文脈である。まず、インフォーマントから得られた回答結果がそれぞれ示され、各話者に存在している縮小辞使用に関する内的体系を把握することが試みられる。全体的な傾向が観察されるのと同時に、インフォーマントによって異なる制約が作用していることも明らかになる。続いて、すべての回答結果をまとめた統計的分析を行う。その結果、性、世代といった話者や聞き手の属性、語用論的文脈など上記の要素は、程度の差はあってもすべてが縮小辞使用に関与的であるということが示される。中でも特に、聞き手が子供の場合に、話者の条件を問わず、最も縮小辞が使用されやすいこと、成人男性は縮小辞使用を避ける強い傾向があり、同じ男性でも老人の場合にはその傾向が見られないこと、若い女性が最も聞き手の条件に敏感なこと、聞き手が話者にとって親しい人物であるか否かが重要な要因であること、発話行為のうち、依頼や要求といった話者の側からの働きかけが強い場合に、縮小辞使用に関する条件がより厳しいということ、などの結果が指摘できる。

以上のように、本論文は、これまでのスペイン語縮小辞研究に残されてきた空隙を埋めることに貢献するとともに、スペイン語縮小辞の実態を複数の側面から明らかにすることを目指したものである。また、縮小辞はその性質から客観的な記述が必ずしも容易ではないが、本論文では、あくまでも実例やアンケート調査など明示的データに依拠することによって、その課題を克服することも試みている。

論文審査の結果の要旨

西村君代氏の博士論文「スペイン語縮小辞について---形態・意味機能と通所・通層的分析」は、スペイン語縮小辞の形態・意味機能と通所・通層的分析を行ったものである。縮小辞はロマンス諸語に広く存在するが、特にスペイン語の語形成において重要な生産的要素であることに着目している。縮小辞は話者の感性を微妙に表現する有効な手段でその用法は多岐にわたるが、一般派生接尾辞と異なり評価接尾辞であるという特質上、客観的な記述が困難な面がある。しかし、西村氏は縮小辞の形態面のみならず、音声・統語・語彙・語用論・話者の社会的属性をも併せて考察している。縮小辞そのものは明確な意味を持たず、実際の意味は各文脈で具体的に決定されるので、いかなる文脈で誰によっていかなる人物に対して用いられるのかという事実は少なからぬ意義を有し、話者の社会的属性なども考慮した、より綿密な研究へとつながる好論文である。

論文は3部から成り立っている。第1部では縮小辞がスペイン語形態論の中でどのような位置を占めるかの理論的確認がなされている。縮小辞の基本的な意味に関する伝統的な議論を網羅的に考察し、「縮小」という概念を内在的に備えた「主観的評価のしるし」とであると明解に定義している。接尾辞の一種である縮小辞はいくつの特徴を有していて、意味的に中立であるが、同氏は評価接尾辞という下位分類を明確に設定した。そして、基体語の語根内部に現れる縮小辞 (Carl-it-os) は、形態論的には接中辞であるが、話者のもつ

語形成規則では縮小辞は接尾辞として存在するので、このような例は特殊な要因に起因する例外であり、縮小辞は接尾辞であるという分析は簡潔・明瞭な結論である。

第2部の縮小辞の通所的分析では、縮小辞の示す地理的バリエーション・多様性・均一性をスペイン語圏約20カ国の中から12都市にわたって調査・分析した。各都市における縮小辞の使用状況を量的・質的な側面を配慮して比較・観察した。その結果、アメリカのスペイン語では縮小辞が頻用・乱用されるという一般的概念を修正し、縮小辞による派生にかかる意味的・統語的制約が少ない都市では縮小辞使用の頻度が高く、“-ito”が標識として最も中立で意味機能的に柔軟性のある、無標の縮小辞であるという結論を導くに至り、さらに“-ito”以外の類義形態が持つ意味の傾向を観察し、各都市における語彙化の程度の高い縮小辞形の指摘をしたことは、先行研究が不十分な中であって快挙と言える。同時に、縮小辞の形態面のみならず、基体語との統語的・語彙的關係も考慮に入れたのは独創的な研究方法である。純粋な意味では異形態といえない「類義形態」と本来の「異形態」という概念を区別する発想は的確で示唆に富んでいる。

第3部では、今まで十分になされなかった語用論的側面と社会言語学的側面を考慮して評価縮小辞の通層的研究を行っているが、その観点は第1部で得られた結論の再確認の意味を有し、斬新な調査研究である。先行研究よりも広範囲にわたる詳しいアンケート調査の結果得られた、性・世代といった話者や聞き手の属性・語用論的文脈などは縮小辞の使用に関して関与的であるという結論には、ポライトネス理論に照らしてみても説得力がある。

氏の論文は、記述にやや冗長の面があるものの、スペイン語縮小辞の実体を複数の面から明らかにし、これまでのスペイン語縮小辞研究がし残してきた空隙を埋めるのに貢献していることが積極的に認められる。

氏は239にわたる参考文献を読みこなし、多面的に綿密な分析を加えている。論文を通じて分析力に優れ、論旨に無理な飛躍もなく、結論は印象論に基づくものではなく、独創的で説得力があり、レジメは達意のスペイン語で書かれていることを総合的に判断した結果、今後スペイン語言語学研究に多大な貢献することが期待されることから、同氏に博士（言語文化学）の学位を授与することに、審査委員全員が一致した。